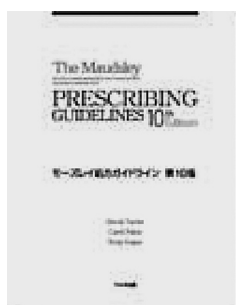


## ■ 書 評



## 『モーズレイ処方ガイドライン第10版』

David Taylor, Carol Paton, Shitij Kapur 著

内田裕之, 鈴木健文, 渡邊衡一郎 監訳

アルタ出版

2011年1月

484頁, 定価 7,875円

精神科治療に関するアルゴリズムやガイドラインは、一般的に実臨床ではなかなか役に立たない印象が強い。エビデンスを重視するほど内容が教科書的になって実践的ではなくなり、実臨床で出会う問題の多くはしばしばエビデンスに乏しい。そのような現状にあって、本書は実践性とエビデンスが絶妙なバランスを保っている画期的なガイドラインと言える。本書の冒頭に、本ガイドラインの目的は通常遭遇する臨床場面における向精神薬の処方について実践的で有用な助言を臨床家に与えることであると明言されている。しかも、その助言は、文献検索、臨床経験、専門家の助言の組み合わせに基づくという。

全体は8つの章で構成されており、総論的な「向精神薬および抗てんかん薬の血中濃度モニタリング」に始まり、「統合失調症」、「双極性障害」、「うつと不安」、「物質依存」という病態に関連した章と「小児・思春期」、「特殊な患者群における向精神薬の使用」、「さまざまな状態および物質」という実臨床で遭遇しやすい問題を扱った章が混在していることも、形式的ではなく、実践に即していることを実感させる。各章の項立てとして実臨床で疑問に感じる問題が多数取り上げられており、簡潔な表で整理され、その参考文献が適切に掲載されていて、臨床家にとっては実用的である。外来や病棟の診察室に置いておいて、迷っ

たときに一読するだけで即戦力となりうるであろう。勿論、英国の医療事情に基づいて作成されているため、必ずしも日本の医療事情と合わない点もあるが、本書の監訳を担当した慶應義塾大学精神神経科学教室の先生方が「読み解く上での注意点」というコラムを随所に配置して、その点を補ってくれている。

通常の治療ガイドラインにはあまり書かれていないような問題や対処法、例えば、クロザピンによる白血球減少症に対するリチウムの効果、クロザピンによる流涎の対策、抗うつ薬誘発性低ナトリウム血症、抗うつ薬の心臓への影響、児童・思春期におけるリスペリドン処方、妊婦に対する薬剤選択、授乳期の向精神薬、腎障害や肝障害がある場合の向精神薬処方、向精神薬と手術などがふんだんに項目として取り上げられていて、きわめて有用である。また、食事や飲み物を利用した秘密裡の投薬、精神疾患におけるプラセボ効果に関する観察、補完療法などの興味ある話題にも言及されている。多くの一覧表が随所に配置され、知識の整理に役立つことは前述したとおりであるが、中でも向精神薬の過量服用における最小致死量やその徴候・症状、副作用（身体的・精神的・血液生化学的）から関連が推定される向精神薬（の逆引き）などは緊急時にも大変便利である。

個人的には、日頃の臨床における疑問の大半はこの一冊で解消された印象であるが、あえて言えば、統合失調症における抑うつ状態への対策：抗うつ薬使用の是非についての項目を設けていただきたい。序の部分には、次の版でもっと知りたいことやあまり役に立たなかったことを教えてほしいという著者の呼びかけがあり、このような姿勢こそが10版を重ねた本書をここまで完成度の高い臨床実践的なガイドラインたらしめている大きな要因であろう。臨床の傍らに置いておきたい一冊である。

(久住一郎)